

建設コンサルタント海外奮闘記 ～外国籍技術者の活躍～

国際委員会 溝口 昌晴 | MIZOGUCHI Masaharu

はじめに

今後、海外のコンサルタント業務に携わりたいと考えている方に向けて、現在海外業務に携わる技術者を紹介する「奮闘記」をお届けします。今回は、八千代エンジニアリング株式会社で働く外国籍の技術者4名にディスカッションをしていただき、彼らの視点から、建設コンサルタントとして海外プロジェクトに携わる際の挑戦や魅力を語ってもらいました。

日本の建設コンサルタント会社に就職した理由

リム ジフン（韓国）：土木施設設計と施工監理が専門です。日本の建設コンサルタント会社に就職したのは、単なる「専門家」ではなく、日本の技術者のようにプロジェクト管理やリスク管理など、幅広いスキルを身に付け、「総合的な視点を持つプロフェッショナル」として成長できると考えたからです。

カイルン ニサ（インドネシア）：学生時代から都市計画に興味を持ち、インドネシアでの独立行政法人国際協力機構（JICA）プロジェクトへの従事や日本での大学院修了を経て、海外プロジェクトに積極的に取り組み国際的な経験を積める日本の建設コンサルタント会社に魅力を感じ、就職しました。

ボリコ チャールズ ンブリ（コンゴ民主共和国）：博士号取得後、その知識を社会の発展に貢献できる専門的な仕事に役立てたいと考えていたところ、大学の先生からの紹介をきっかけに現職の会社に就職しました。

ゲン トウアン（ベトナム）：自然災害が多いベトナム北部で育ち、自然災害対策に強い関心を抱きました。災害の共通点が多い日本の大学で河川・水文を学び、日本の建設コンサルタントが災害リスク軽減に重要な役

割を果たすことに気づき、日本での就職を決意しました。

働き始めて感じた困難と克服の工夫

リム：日本語の表面的な意味だけでなく、雰囲気やニュアンスを読み取る「察する」文化に苦勞し、会議やクライアントとの協議で語学の壁を感じました。克服のため、相手の意図を意識し説明を簡潔にすること、現場で使われる専門用語や業界用語を覚える工夫をしました。

ニサ：業務外の飲み会文化やビジネスメールの敬語に慣れるのに時間がかかりました。毎日仕事で使うフレーズを覚えたり、AI翻訳ツールを使った作文を同僚にチェックしてもらったりしました。海外出張時の現地の方々との意思疎通は、外国籍社員に限らず苦勞するところです。現地の言語や文化に応じて意思疎通の仕方を工夫したり、治安や衛生環境の違いを踏まえて安全管理に注意を払ったりしています。

チャールズ：先のお二人と同じく、日本語の専門用語や建前文化への適応に苦勞しました。また、アフリカ諸国への出張が多いため、気候や環境の変化で体調を崩さないよう健康管理に気をつけています。

ゲン：日本での生活には、文化や言語の違いだけでなく、食文化や社会的な習慣に戸惑うことが多かったですが、周囲のサポートや自身の努力で慣れることができました。海外出張時のコミュニケーションの問題は、現地の言葉を学んだり、通訳や現地スタッフに支援してもらったりして誤解を避けるよう努めています。

ワーク・ライフ・バランス

ニサ：残業はありますが、個人のタイムマネジメント

次第で、有給休暇やフレックスタイム制度を活用してコントロールできています。

リム：「時間」ではなく「時間の濃度（エネルギー）」を意識し、集中と休息のメリハリをつけることが大切だと考えています。

チャールズ：業務が忙しい時期には遅くまで残業することもありますが、午後5時30分までの勤務を理想として心がけています。ただし、以前住んでいたイタリアなどと比べ、日本は長期休暇を取りづらい環境だと感じています。

ゲン：現在2児の子育て中ですが、在宅勤務制度を活用して育児と仕事のバランスを取っています。今後は、労働時間の柔軟性をさらに高める制度が必要だと感じています。

海外プロジェクトに携わって感じるこ

チャールズ：外国籍社員が海外プロジェクトに参加する強みとして、コミュニケーションの障壁を埋める架け橋となれること、海外の潜在的なパートナーとの関係構築を通じて新たなビジネスチャンスを発見できること、そして現地の言語を用いることで円滑なコミュニケーションやコスト削減に貢献できることが挙げられると思います。

ゲン：出身国を対象とした業務では、現地の情報や人的ネットワークを最大限に活用でき、外国と日本の両方の視点を持つことで、現地との架け橋としての役割を果たせることも強みです。

リム：異なる文化や考え方を柔軟に理解できるため、多様な視点から問題解決のアイデアが提供できる点が強みです。現地の文化を尊重しながら日本の技術やマネジメント手法をローカライズすることで、より良い成果が生まれると信じています。

ニサ：現地の文化や習慣を理解し尊重することがプロジェクト成功の鍵であり、異なるバックグラウンドを持つメンバーとの協働が、より良い成果を生むと感じています。

チャールズ：プロジェクトチームのダイバーシティは重要で、業務機会の拡大にもつながると感じています。JICAだけでなく世界銀行やアジア開発銀行の業務でも、多様な視点や経験を持つメンバーが集まることで



プロジェクト作業所での勤務状況（リム氏：右上）



津軽ダム の視察（ゲン氏）

プロジェクトの質が向上することを実感しています。
ゲン：海外プロジェクトに携わることで、異なる視点や価値観への理解が深まり、自己成長につながっています。また、プロジェクトを通じて築いた人的ネットワークはキャリア形成にも役立っています。

海外プロジェクトに携わる思い

チャールズ：海外プロジェクトには、世界の発展に貢献しているという高いモチベーションを持って取り組み、その成果がより良い未来を築くことに貢献できることを誇りに思っています。

リム：発展途上国・地域におけるインフラ整備支援を通じて、世界の平等な発展に貢献していきたいと考えています。

ニサ：国や地域ごとの文化や課題を理解し、持続可能で実現可能な開発計画を提案し、インフラ整備で地域の生活を向上させることにやりがいを感じています。

ゲン：日本の防災技術を学び、母国を含む発展途上国の防災に貢献し、安全な社会を実現させたいと考えています。そして、現在そのためのプロジェクトに携われていることにやりがいを感じ、充実した日々を過ごせています。

おわりに

今回の4人のお話では、異なる視点や価値観を持った技術者がプロジェクトに参画することで、より良い成果が生まれることが強調されました。外国籍社員の受け入れや異業種との連携を進めることで、海外に向けた新たなビジネスチャンスが生まれる可能性があります。

国際委員会では、今後も海外業務への新規参入を検討されている皆様にとって参考となるセミナー等を開催する予定です。